

Prajnaparami taratnagu?asa?cayagatha (Sanskrit Recension A) におけるa-語幹名詞の語末-a

著者	稲葉 維摩
雑誌名	真宗文化 : 真宗文化研究所年報
号	28
ページ	16-1
発行年	2019-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000937/

Prajñāpāramitāratnaguṇasaṃcayagāthā (Sanskrit Recension A) における a-語幹名詞の語末-a

大谷大学真宗総合研究所 東京分室 PD 研究員

稲葉 維摩

1. はじめに

Prajñāpāramitāratnaguṇasaṃcayagāthā (以下 Rgs) は、仏教混交サンスクリット語で書かれた大乘仏教の經典である。仏教混交サンスクリット語はいくつかの方言的特徴が混ざりあった仏教文献特有の言語で、各文法カテゴリーには多くの変異形 (variant) がある。本論文では稲葉 (2018) と同じ問題、すなわち a-語幹名詞の語末-a について、2 系統ある Rgs の内、Sanskrit Recension A (以下 Rgs (A)) を用いて見ていく。Rgs (A) の仏教混交サンスクリット語は、稲葉 (2018) で扱ったテキストの言語よりも古いと考えられている。本論文では稲葉 (2018) で述べたこと、すなわち語末-a は語形変化の形ではなく、韻律の都合による語形変化の省略と考えられることが、古いテキストにも当てはまることを述べる¹⁾。

2. Rgs (A) の概要

Rgs は 32 章からなる韻文の經典で、大乘仏教の主題の 1 つである般若波羅蜜 (prajñāpāramitā-)²⁾ を説き明かす。1-28 章は、同じく般若波羅蜜を説く散文の經典 Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā (以下 Aṣṭ) に相当する内容である³⁾。韻文では韻律の都合上、散文よりも言葉が制限されるため、中には Aṣṭ を参考に

しなければ理解が難しい部分もある。韻律は *vasantatilakā* である⁴⁾。

Rgs には 2 系統の写本がある。それぞれ A, B と呼ばれている。本論文が扱う Rgs (A) は A の系統を底本にした校訂本である。B の系統に基づく校訂本は Rgs (A) よりも前に出版されているが、湯山 (1973) によれば、A の方が原型に近い形を保っていて最もよい読みを伝える。

Rgs を伝える仏教混交サンスクリット語は仏教文献特有の言語である。紀元前 3 世紀以降、部派仏教や大乘仏教の文献が次第に成立していく過程で、中期インド・アーリヤ諸語やサンスクリット語が混ざった言語ができあがっていった。この言語を仏教混交サンスクリット語と呼ぶ。Edgerton (1953) は仏教混交サンスクリット語の文法書と辞書だが、そこでは Rgs を参照することができなかった。その後、B の方の Rgs を参照した Edgerton (1961) は、Rgs が自身の文法書と辞書を補強する重要な資料であることを述べている。湯山 (1973:278-279) は Rgs を「般若經典群の中で、いわゆる仏教梵語の最古層の特徴を示す、唯一の例であろう。F. Edgerton は、仏教梵語文献中で、*Mahāvastu-avadāna* が、もっともむずかしく混乱していて、おそらくまたもっとも古く重要であろう、と述べているが、宝徳蔵はそれ以上であるといっても過言ではない。きわめて興味深い特殊な形や構文、あるいは語彙を見出すことができる」と評価している⁵⁾。このように、Rgs は仏教混交サンスクリット語の最古層を伝える重要なテキストだと考えられている。Yuyama (1973 b) は Rgs (A) の仏教混交サンスクリット語形を網羅的に集めて文法書としてまとめた。ここには語形の出現箇所が記録されていて、本論文が扱う問題の調査に適している。

3. 問題の所在

仏教混交サンスクリット語の語形には多くの変異形がある。この言語の文法書と辞書である Edgerton (1953) が変異形を記録し、由来などを考察している。a-語幹名詞の語形変化には -a という語末が載っている (Edgerton 1953:§

8)。この語末は結果的に語幹の形のままであるため、性・数・格がわからず、多義的と言える。Edgerton (1936, 1939, 1953:§8) によれば、語末-a は単数のあらゆる格と複数の主格・対格に現れ、ほぼ韻文に限られる。由来としては、語末の子音が消失するという音変化から-a が一般化したことや、韻律の都合によると言われている。

稲葉 (2018) では、このような語末-a に出現の環境や傾向が見出されることを示した。すなわち「主格・対格に現れることが圧倒的に多く、その他の格では少ない。韻律上の音節の長さが短い箇所にも現れる。語形変化した同格の語とともに現れる。対格を取る動詞とともに現れる。存在文や所有文の主語として現れる。項目を列挙する際に現れる」である。

Edgerton (1953) や Rgs (A) の文法書である Yuyama (1973 b) は、仏教混交サンスクリット語の各文法カテゴリーに現れる変異形を詳細に記録している。以下に、Yuyama (1973 b:§8) の記載を筆者が表の形に改めて、a-語幹名詞の語形変化を示した⁶⁾。Rgs (A) では、語末-a が単数・複数の主格・対格と単数奪格、処格に見つかる。

a-語幹男性名詞 deva-「神」

	単数	複数
主格	devo, devu, deva, devā (1), devaṃ (1)	devā, deva, devi, devo, devu, devāyu (1)
対格	deva, devu, devo	devā, deva, devāṃ
具格	deveno (1)	devehi, devebhiḥ (行末), devebhi (1)
与格	devāye (行末)	
奪格	deva, devātu, devata, devatu (1), devāye (1)	
属格		devāna, devānu
処格	deva, devi, devasmi, devasmin (1)	

a-語幹中性名詞 dāna-「付与、布施」

	単数	複数
主格	dānu, dāna, dāno, dānā	dānā, dāna

対格	dāna, dānu	dānā, dāna
具格		dānehi, dānehī (1), dānebhiḥ (行末)
与格	dānāye (行末)	
奪格	dāna (1), dānātu	
属格		dānāna
処格	dāna, dāni, dānasmi	

語末-a はそれぞれの格の変異形のように見えるし、Edgerton (1953:§8) や Yuyama (1973 b:§8) にも性・数・格に応じて格語尾のように記載されているが、こういったことには注意が必要である。実際の文で語末-a がどの性・数・格に相当するかは、文脈や他の語との関係から解釈される。しかし、何らかの性・数・格に解釈できることと、語末-a が仏教混交サンスクリット語の語形変化であることとは直結しない。稲葉 (2018) に述べたように、仏教混交サンスクリット語の語形変化は、原則的にそれぞれ異なる語尾によって性・数・格を区別していると言える。上の表を見ると、主格・対格は語形が融合 (syncretism) しているものもあるが、それ以外の格では基本的に語幹に音節の増えた明示的な語尾によって互いを区別している。その反面、語末-a は多義的で、上述の環境や傾向のもとでしか現れない。そのため、語末-a は性・数・格を表す語形変化とは言い難く、韻律による語形変化の省略ではないかと考えられる。

4. 実例の検討

4.1. 他の語との関係から語末-a を解釈できる場合

それでは語末-a の例を見ていこう。語末-a の語は下線で、語末-a に関する語は語末-a の語とともにボールド体で示した。原文の “|, /, //” は行の区切りで、“|” は 1, 3 行目、“/” は 2 行目、“//” は 4 行目の終わりを表す。

まず、語末-a が語形変化した同格の語とともに現れる例を見る。(1) では、

語末-a の語 **bodhisattva** 「菩薩」が男性単数主格に語形変化した代名詞 **so** 「彼」と並んでいる。(2) では語末-a の **sattva** 「衆生」が単数対格の過去分詞 **dukhitaṃ** 「苦しんでいる」とともに現れている。

(1) Rgs (A) 1.5d **so bodhisattva** carate sugatāna prajñāṃ //
 「かの菩薩は善逝達の般若に従事する」。

(2) Rgs (A) 12.6c **dukhitaṃ ca sattva** tri-apāyī samuddharanti |
 「三悪趣で苦しんでいる衆生を彼ら（導師達）は助ける」。

奪格とともに現れる例は (3) のみである。4 行目 **kasmārtha** は単数奪格の疑問詞 **kasmā** と語末-a の **artha** 「目的、理由」が連声したものである。なお、1 行目の語末-a の語 **ātmaśānta** 「アートマン／自身が落ち着いている」は男性単数主格の **viharan** 「過ごしている」（現在分詞）、**bodhisattvo** とともに現れている。

(3) Rgs (A) 1.11 **evātmaśānta**⁷⁾ **viharann** iha **bodhisattvo** | **so vyākṛto puri-**
makehi tathāgatehi /
na ca manyate ahu samāhītu vyutthito vā | **kasmārtha** dharmaprakṛtiṃ
parijānayatvā //

「この通り、この世でアートマン／自身が落ち着いて過ごしている菩薩は、昔の如来達に授記されている。

『私は三昧に入っている』あるいは『出ている』と彼は考えない。どういう理由でかといえ、ダルマの本質を理解したからである」。

(4) では、**anāgata** 「未来」が単数処格の变化形 **adhvakasmin** 「時」と並んでいる。

(4) Rgs (A) 2.13d **buddho bhaviṣyasi anāgata** **adhvakasmin** //
 「君は未来の時にブツダとなるだろう」。

次に、対格を取る動詞とともに現れる場合を見る。(5) 2行目の *saṅgākṣaya* 「執着の消滅」は動詞 *icchatī* 「求める」(直説法現在3人称単数)に先立つ⁸⁾。(6) では、3行目 *dharma* 「ダルマ、教え、法」が絶対分詞 *choritva* 「捨てて」に後続し、4行目 *patha* 「道」が絶対分詞 *hitva* 「去って」に先立つ。なお、(6) 1行目 *satkārakāma* 「尊敬を求める者」と2行目 *sāpekṣacitta* 「心に欲望のある者」は複数主格の語と並んでいる。

- (5) Rgs (A) 1.16 *kiṃ kāraṇaṃ ayu pravucyati bodhisattvo | sarvatra saṅgākṣaya icchatī saṅgachedī /*

bodhiṃ sprśiṣyati jināna asaṅgabhūtām | tasmā hu nāma labhate ayu bodhisattvo //

「どうしてこの者は菩薩と言われるのか。執着を断つ者として、あらゆる所で執着の消滅を求める。

勝者達の、執着を離れたさとり(菩提)に達するだろう。それ故、この者は菩薩として名前を得る」。

- (6) Rgs (A) 11.6 *satkārakāma bhaviṣyanti ca lābhakāmāḥ | sāpekṣacitta kulasamstavasamprayuktāḥ /*

choritva dharma kariṣyanti adharmakāryaṃ | patha hitva utpathagatā imumārakarma //

「尊敬を求める者や利益を求める者、心に欲望のある者、家系の称賛に結びつけられた者になるだろう。

ダルマを捨てて、ダルマに合わない行為をするだろう。正しい道を去って、外れた道を進んでいる。これが悪魔の行為である」。

次に、存在文・所有文を見る。「～に…がある」といった文を存在文や所有文という。「～に」は属格か処格で、「…が」は主格で表される。存在文・所有文では、語末-a は必ず主格に相当する。属格や処格は変化形で現れ、語末-a がそれらの格に相当することはない。(7) 3行目は否定文である。語末-a の

skandha「主要な部分（蘊）」は主格に相当し、関係代名詞の yasmin が単数処格の変化形である。同じく否定文の（8）4行目では、代名詞 tasya が属格の語形変化である。なお、（7）1行目の bodhisattva は語形変化した同格の関係代名詞 yo と並んでいる。（8）2行目 janata「人々」は複数対格の代名詞 imāṃ と並び、3行目 vividhakārya「様々な行動」は現在分詞 nidarśayantaṃ「見せている」（単数対格）に先立つ。

- (7) Rgs (A) 18.2 **yo bodhisattva** imu budhyati sarvadharmān | gambhīrayānaparamārthanirūpalepān /
yasmin na **skandha** na pi āyatanam na dhātu | kiṃ vā sa puṇy-
 asamudāgamu kiṃ ci tasya //

「このすべてのダルマを深遠な乗り物であり、最高の目的であり、執着を離れたものだとさとする菩薩、

主要な部分（蘊）も拠り所（処）も構成要素（界）もない者、どうしても彼に何らかの福德の達成があるだろうか」。

- (8) Rgs (A) 26.5 yatha māyākārapuruṣasya na eva bhotī | toṣiṣy' **imāṃ janata** so ca karoti kāryam /
 paśyanti taṃ **vividhakārya nidarśayantaṃ** | na ca **tasya** kāyu na pi **citta**
 na nāmadheyam //

「幻術師によって作られた人に、『この人々を満足させよう』という、このような考えは生じない。けれども彼は行動する。

人々は彼が様々な行動を見せているのを見る。けれども彼には身体も心も名前もない」。

項目を列挙する中に語末-aの語が現れる場合がある。（9）には人間の構成要素が列挙されている。それらは定動詞 paridīpayi「示すなら」（願望法現在3人称単数）の目的語に当たる。1行目 rūpa「色形」、2行目 anitya「無常」が語末-aである。（10）には苦痛が列挙されているが、その内の śīracheda「斬首」

が語末-a である。なお、3 行目 *duḥkha* 「苦しみ」は定動詞 *utsahāmī* 「耐える」(1 人称単数) の目的語である。

(9) Rgs (A) 5.1ab *sacī rūpa saṃjñā*⁹⁾ *apī vedana cetanā ca | cittam anitya paridīpayi bodhisattvo /*

「もし、色形、意識、感受、意思、心を無常だと菩薩が示すなら」。

(10) Rgs (A) 30.14 *kaśadaṇḍaśastravadhabandhanatāḍanās ca | śīracheda hastacaraṇā tatha karṇanāsā /*

yāvanti duḥkha jagatī ahu utsahāmī | kṣāntīya pāramita tiṣṭhati bodhisattvo //

「鞭や棒や刃物による殺害、拘束、鞭打ち、斬首や断手、あしきり、同様にみみきりやはなきりといった

苦しみに私が耐える世間の限りにおいて、菩薩は忍耐の波羅蜜に¹⁰⁾留まる」。

副詞句では語末-a の解釈が比較的容易である。(11) では、具格や対格を伴い「～なしに」を意味する不変化詞 *vina* (サンスクリット語の形は *vinā*) とともに語末-a の語 *bodhicitta* 「さとりを求める心、菩提心」が現れている。文脈からも「さとりを求める心なしに」の意味がわかる。

(11) Rgs (A) 5.5 *asato ṅkurasya drumasambhavu nāsti loke | kutu śākha-patṭrāphalapuṣpa-upādu tatra /*

vina bodhicitta jinasambhavu nāsti loke | kutu śakrabrahmaphalaśrāvakaṇḍubhāvā //

「世間では、芽がなければ木が生まれることはない。その場合にどうして枝や葉や果実や花の発生があろうか。

世間では、さとりを求める心なしに勝者が生まれることはない。どうしてシャクラや梵天の果報、声聞の出現があろうか」。

4.2. 語末-a が単独で現れる場合

以上に見たように、語末-a は他の語との関係から性・数・格の解釈を補うことができる環境に現れる場合が多い。しかし、関係する語がなく、単独で現れることも少なくない。その場合には文脈から意味を解釈しなければならない。

(12) 3 行目では、語末-a の bodhisattva が単独で現れている。文脈から主語と解釈できる。そうすると、4 行目の定動詞 gaveṣayisyanti 「求めるだろう」(未来 3 人称複数) から、数は複数であることがわかる。

(12) Rgs (A) 11.5 yatha bhojanam śatarasam labhiyāna kaś cit | mārgeyu ṣaṣṭi-
ku labhitva sa bhojanāgryam /
tatha **bodhisattva** imu pāramitāṃ labhitvā | arhantabhūmiya **gaveṣayisy-**
anti bodhiṃ //

「ある者が百味の食事を得ても-食事の中の最高のものを得ても-、60 日で実る穀物を求めるように、
そのように、菩薩達はこの波羅蜜を得ても、阿羅漢の地位におけるさとりを求めるだろう」。

(13) 2 行目 nitya 「常の」は文脈上、副詞的な意味だと考えられる。nitya-は対格で副詞になるからである。なお、1 行目 kīrtikāma 「名声を欲しがる」は等位接続の ca によって次の文の複数主格 krodhaparītacittāḥ 「怒りに到達されていない心の」と並んでいることがわかる。2 行目 gṛhibhūta 「在家者である」、anadhyoṣita 「固執していない」も文脈上 krodhaparītacittāḥ と並んでいると考えられる。

(13) Rgs (A) 17.5ab na ca **kīrtikāma** na ca **krodhaparītacittāḥ** | **gṛhibhūta**
nitya anadhyoṣita sarvavastūṃ /

「名声を欲しがらず、心は怒りに到達されておらず、在家者でありながらも、常にすべての事物に固執していない」。

(14) では3行目 sarvadharma 「あらゆるダルマ」が単独で現れている。文脈上、asthito 「留まっていない」(男性単数主格)の場所を指していると考えられる。Yuyama (1973 b:§8.45)にも sarvadharma は男性単数処格で載っている。

(14)Rgs (A) 1.6cd so sarvadharma asthito aniketacārī | apariggrhītu labhate
sugatāna bodhiṃ //

「彼はあらゆるダルマに留まっておらず、家に住むことなく行い、無所有で、善逝達のさとりを得る」。

(15) では、4行目 mahasattva 「偉大な衆生」が単独で現れている。2-4行は、mahasattva という呼称の理由を尋ねる1行目への答えである。4行目は、3行で述べる理由をまとめている。そのため、文脈から4行目 mahasattva が主語であることは容易に理解できる。なお、1行目 mahasattva は代名詞 so (男性単数主格)と並んでいる。

(15)Rgs (A) 1.17 mahasattva so atha kinocyati kāraṇena | mahatāya agru
ayu bheṣyati sattvarāṣe /
dṛṣṭigātān mahati chindati sattvadhāto | mahasattva tena hi pravucyati
kāraṇena //

「さて、どういう理由でその者は偉大な衆生と言われるのか。この者は衆生の集団の中で偉大さの点で最上になるだろう。

多くの衆生の総体の中で、悪い見解に到達された者達を切る。そういう理由で、偉大な衆生と説明される」。

5. 主格・対格の多さ

以上に語末-aの例を見てきた。次に、語末-aが主格・対格に多く現れることを見ていく。以下に、Yuyama (1973 b)を使って語末-aがどの格に相当するかの回数を示した。語末-aは主格・対格に相当することが圧倒的に多い。

a-語幹男性名詞

単数主格 102¹¹⁾ (Yuyama 1973 b:§8.10)

単数対格 29 (§8.23)

単数奪格 1 (副詞的 2) (§8.36, 38)

単数処格 20 (§8.45)

複数主格 107¹²⁾ (§8.57)

複数対格 45 (§8.69)

a-語幹中性名詞

単数主格 37 (§8.19)

単数対格 73 (§8.28, 30, 32)

単数奪格 1 (§8.37)

単数処格 13 (後置詞的 2) (§8.46, 47)

複数主格 5 (§8.65-67)

複数対格 4 (§8.75)

主格・対格に多いことから、それらの格は語末-a になりやすく、主格・対格以外の格は語末-a になりにくいということが予想できる。このような傾向はなぜ現れるのだろうか。稲葉 (2018) で述べたが、主格・対格は動詞の中心的な項を表す格である。主格・対格では語末が省略されても、他の語との関係や文脈から性・数・格の理解を補うことが比較的容易である。本論文で見た通り、同格の語の変化形とともに現れる場合、対格をとる動詞とともに現れる場合、存在文・所有文で属格や処格は決して-a にならないこと、文脈から解釈される場合があった。一方、主格・対格以外の格は、基本的に明確な語尾が格の示し手である。その語尾を欠くと、性・数・格の理解が難しくなってしまうと考えられる。性・数・格の理解が補えるのは、語末-a が同格の語の変化形とともに現れるか、副詞的な意味を表す場合であり、解釈の手段が主格・対格の場合より少ない。それ故、主格・対格以外の格は語末-a になりにくいと考えられる。

6. 男性単数主格の語末に対する考察

本論文では、語末-a が文法的な語形変化の形でないと考えられることを述べた。このことは、Edgerton (1953) や Yuyama (1973 b) が記録した仏教混交サンスクリット語の名詞語形変化の再考につながる。ここでは具体的に、Rgs (A) に現れる a-語幹名詞の男性単数主格の語形変化に考察を加えてみたい。

2. で表に示したが、Yuyama (1973 b:§8) によれば Rgs (A) の a-語幹名詞の男性単数主格には devo, devu, deva, devā, devaṃ の5つの形がある。この中でまず、devo は中期インド・アーリヤ諸語で標準的な男性単数主格の語尾である。deva は本論文に述べた通り、変化形とは考え難い。devu は Edgerton (1953:§8.20) が述べるように、devo の変異形といえる。

devā と devaṃ はどちらも1回限りの出現であるため、文法的な男性単数主格の語尾とは言えない。特に後者には解釈の余地がある。それぞれを見てみよう。Yuyama (1973 b:§8.13) によれば、(16) 2行目 abalā 「弱い」が単数主格である。この文は鳥のことを話題にしている、kṣīṇapakṣo 「翼を失った」が単数主格の語形変化をしているため、abalā も同格に解釈される。語末-a が韻律に合わせて長くなったと言える。

(16) Rgs (A) 16.4ab pakṣisya yojanaśatā maha ātmabhāvo | pañcāśatāpi abalā
bhuyu kṣīṇapakṣo /

「鳥の身体は大きく、100 ヨーjana、500 [ヨーjana] もある [としよう]。[しかし] 弱く、さらに翼を失ったもの [になるとしよう]」。([] は筆者の補い)¹³⁾

Yuyama (1973 b:§8.14) によれば、(17) 2行目 ādiśūnyam 「もともと空虚な」が単数主格である。文脈から、引用文 (iti が引用を示す) の主語に読める男性名詞の skandha- 「主要な部分 (蘊)」に一致すると解釈したと思われる。

だが、和訳したように、単数対格の補語に解釈することもできるだろう。なお、1 行目 bodhisattva は単数主格の現在分詞 caramāṇu 「行う」と並んでいる。なお、2 行目の語末-a の語 anupāda 「不生」と skandha は単独で現れているが、名詞文として主語述語の関係を読み取れるだろう。

(17)Rgs (A) 20.1ab puna **bodhisattva caramāṇu** jināna prajñām | anupāda skandha iti jānati ādiśūnyam /

「また、菩薩は勝者達の般若を行っている時、『主要な部分（蘊）は不生である』というように、〔主要な部分（蘊）を〕もともと空虚なものとして認識する」。([] は筆者の補い)

以上のことから、a-語幹名詞の男性単数主格の基本的な語形変化は devo だと言えそうである。変異形が多くて煩雑に見える仏教混交サンスクリット語の語形変化も、このように検討することで、体系を見ていくことができる。

7. まとめ

本論文では、仏教混交サンスクリット語の古層を伝えると言われている Rgs (A) を用いて、a-語幹名詞の語末-a を検討した。Rgs (A) でも、語末-a の出現は稲葉 (2018) で述べた環境や傾向に準ずる。すなわち、語末-a は韻律上の短い音節が必要とされる箇所に見える。語末-a の性・数・格の解釈は、他の語との関係や文脈から補われる。

語末-a は主格・対格に現れることが圧倒的に多く、その他の格では少ない。このことから主格・対格は-a になりやすく、その他の格はなりにくいことがわかる。Rgs (A) の a-語幹名詞の語形変化は、基本的に明確な語尾によって性・数・格を区別している。その標識を欠いた語末-a は、他の語や文脈によらなければ、性・数・格の理解が難しい。そのため、稲葉 (2018) に述べたように、語末-a は性・数・格を標示する変化形ではなく、韻律による語形変化の省略ではないかと考えられる。

凡例

Rgs (A) 1.5 d=Rgs (A) 第1章 第5詩節 4行目 (a-d のアルファベットは1-4 行に相当する)

略号と参考文献

Rgs = Prajñāpāramitāratnaguṇasamcayagāthā

Aṣṭ = Vaidya, P. L. 1960. *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā: With Haribhadra's Commentary Called Āloka*. Darbhanga: Mithila Institute.

Rgs (A) = Yuyama, Akira. 1976. *Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-samcaya-gāthā (Sanskrit Recension A)*. Cambridge: Cambridge University Press.

Conze, Edward. 1960. *The Prajñāpāramitā Literature*. The Hague: Mouton.

———. 1967. *Thirty Years of Buddhist Studies*. Oxford: Bruno Cassirer.

Edgerton, Franklin. 1936. Nouns of the a-Declension in Buddhist Hybrid Sanskrit. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 1(1) : 65–83.

———. 1939. Endless Noun Case-Forms in Prakrit. *Journal of the American Oriental Society* 59(3) : 369–371.

———. 1953. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. 2 vols. New Haven: Yale University Press.

———. 1961. The Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-samcaya-gāthā. *Indo-Iranian Journal* 5(1) : 1–18.

Yuyama, Akira. 1973 a. Remarks on the Metre of the Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-samcaya-gāthā. In Perala Ratnam (ed.), *Studies in Indo-Asian Art and Culture*, vol.2: 243–253. New Delhi: International Academy of Indian Culture.

———. 1973 b. *A Grammar of the Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-samcaya-gāthā (Sanskrit Recension A)*. Canberra: Faculty of Asian Studies in association with Australian National University Press.

稲葉維摩 2018 「仏教混交サンスクリット語における a-語幹名詞の語末-a について—Larger Sukhāvātyvyūha と Saddharmapuṇḍarīkasūtra に基いて—」『大谷學報』98(1) : 45–62.

榎本文雄、河崎豊、名和隆乾、畑昌利、古川洋平 2014 『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—パウダコーシャ III』東京：山喜房佛書林。

河崎豊 2017 「パーリ文献の paññā」『仏教文化研究論集』18:19: 5–15.

中村隆海 2007 「Veda 文献における pra-√jñā の語義と用法」『松濤誠達先生古稀記念梵文学研究論集』111–137 東京：ラトナ・コーポレーション株式会社 大祥書籍。

湯山明 1973 「宝徳藏般若に関する若干の問題」中村元博士還暦記念会 (編) 『インド思想と仏教：中村元博士還暦記念論集』271–282 東京：春秋社。

註

- 1) 本論文は日本印度学仏教学会 第 69 回学術大会 (2018 年 9 月、東洋大学) で行った口頭発表に基づくものである。
- 2) 最近では、仏教以前の文献であるヴェーダ文献やパーリ語の仏教文献の検討によって、*prajñā-*は「理解 (力)」という意味であることが示されているが (中村 2007; 榎本、河崎、名和、畑、古川 2014; 河崎 2017)、本論文では *prajñāpāramitā-*、*prajñā-*、*pāramitā-*の訳に、それぞれ伝統的な音写の「般若波羅蜜」、「般若」、「波羅蜜」を当てた。これらの語の意味内容は仏教文献の説くところや学界での理解も含めて多様だが、本論文の内容には直接的に関わらないからである。
- 3) Conze (1960:16-17)、湯山 (1973) など。Conze (1967:124) はその中でも 1, 2 章の内容が古く、紀元前 100 年頃にさかのぼると考えている。
- 4) 行頭の長音節は短音節 2 つに替わる場合も多い (Edgerton 1961, Yuyama 1973 a)。
- 5) 引用文の「宝徳藏」は Rgs のことで、漢訳の名称『佛説佛母寶徳藏般若波羅蜜經』(法賢訳) による略称である。
- 6) 1 回だけの出現には“(1)”を付した。Rgs (A) にはサンスクリット語の変化形も現れるが、Yuyama (1973 b) はそれを取り上げていないため、表には空白の欄ができる。例に用いた名詞は簡便さを求めた筆者の選択であり、実際に Rgs (A) に現れる語ではない。
- 7) *evātmaśānta* では *eva* (*evam*) 「このように」と *ātmaśānta* の連声が起こっている。
- 8) *saṅgakṣaya icchatī* のように、語末-a に母音が後続する環境では連声の解釈が出てくるかもしれない。例えばこの-a *i*-に当てはまるサンスクリット語の連声は、-a がもともと-as か-e の場合である。*saṅgakṣayas* は男性単数主格、*saṅgakṣaye* は単数処格の語形変化である。だが、いずれもこの文に合った解釈とは言い難い。もちろん、テキストの中には連声が当てはまる例もあるかもしれない。しかし、問題の語末-a が連声に関わらず現れるのは Edgerton (1936, 1939, 1953:§8), Yuyama (1973 b:§8), 稲葉 (2018) などからわかる。また、本論文は語末-a が仏教混交サンスクリット語の語形変化かどうかということを問題にしている。そのため、ここでは連声に言及しないでおく。
- 9) *saṃjñā* 「意識」と *vedanā* 「感受」は *ā-*語幹女性名詞 (*saṃjñā-*、*vedanā-*) である。仏教混交サンスクリット語の *ā-*語幹女性名詞のパラダイムは融合が著しい。本論文で扱う範囲を超えるため、言及しないことにする。
- 10) 4 行目 *pāramitā* 「波羅蜜」は *ā-*語幹女性名詞 (*pāramitā-*) であるため、本論文では言及しない。
- 11) Yuyama (1973 b:§8.10) “*sattva*” の項目の “i 7d” は “i 17d” の誤りと思われる。また、同項目の “XII 10a” の *sattva* は定動詞の数から複数主格に解釈できるため、「複数主格」に加える。
- 12) 前注に示した Yuyama (1973 b:§8.10) “*sattva*” の項目の “XII 10a” を加えた。また、§8.57 “-*sāgara*” の項目の “XIV 4a” は “XV 4a” の誤りと思われる。
- 13) この韻文では言葉がかなり省略されているため、Aṣṭ を参考にしなければ読解が難

しい。参考になる箇所は次の通りである。Aṣṭ 155 tad yathāpi nāma śāriputra pakṣiṇaḥ śakuner yojanaśatiko vā dviyojanaśatiko vā triyojanaśatiko vā caturyojanaśatiko vā pañcayojanaśatiko vā ātmabhāvo bhavet. sa trāyastriṃśeṣu deveṣu vartamāno jambūdvīpam āgantavyaṃ manyeta. sa khalu punaḥ śāriputra pakṣī śakunir ajātapakṣo vā bhavet. śīrṇapakṣo vā bhavet. chinnaṇapakṣo vā bhavet. 「それは例えば、シャーリプトラよ、翼のある鳥に100 ヨージアナ、あるいは200 ヨージアナ、あるいは300 ヨージアナ、あるいは400 ヨージアナ、あるいは500 ヨージアナの身体が生じるとしよう。その鳥は三十三天で活動している時、ジャンプ州に行くべきだと考えるとしよう。けれどもその翼のある鳥が、シャーリプトラよ、翼のないものになるとしよう。あるいは翼の壊れたものになるとしよう。あるいは翼のちぎれたものになるとしよう」。